

## 「みやこの舞楽」展によせて

## 「応永舞楽図」と二つの模本

## —東京国立博物館本と新出の個人蔵「舞楽図巻」—

特別展「みやこの舞楽—舞楽面と舞楽図でたどる芸能の美—」展では、平安時代～江戸時代に製作された舞楽面の姿遷をたどるとともに、中世以降に製作された舞楽図を通して宮中・南都・天王寺を中心に育まれた芸能である舞楽の歴史をご紹介します。その中で、「応永舞楽図」と通称される舞楽図巻の模本2点を展示します。

「応永舞楽図」とは、サンフランシスコ・アジア美術館所蔵の「舞楽図巻」(1巻、紙本着色、28.2×435.6cm、以下「応永原本」と略)のことで、「応永十五戊子年十一月八日、以秘本写之(山科教言花押)」の奥書があることからこのように通称されています。同本は、全十二紙からなり、前から順に地久、散手、貴徳、抜頭、蘇志摩、還城楽、崑崙八仙、採桑老、綾切、陵王、落跡(納曾利)の11曲の舞人を、一紙に一曲ずつ描きます。山科教言の「教言卿記」応永15年(1408)の記事には、10月23日より仁和寺御室の母尾宮義仁法親王所蔵の舞絵(舞楽図)三巻を借り受け、安倍季英がこれを模写し、11月8日に写し終わった旨が記載されており、これにより応永原本が応永15年に安倍季英によって描かれたことがわかっています。

この応永原本の模本として知られているのが、東京国立博物館所蔵「応永舞楽図巻模本」(1巻、紙本着色、29.7×312.8cm、以下「東博本」と略)で、応永原本の地久～崑崙八仙までの7曲を描き(他4曲は欠)、巻末には「応永十五年～」の墨書並びに山科教言の花押に

たるまで忠実に模写しています。さらに奥書には「右舞楽絵一軸、松平帯刀所蔵応永十五年之模本也、文政庚辰八月六日模、中務法眼養信(花押)」とあり、松平帯刀が所蔵していた「応永五年之模本」を、文政3年(1820)8月6日に狩野養信が模写したことが知られます。

もう一つの模本が、現在個人所蔵となっている「舞楽図巻」(以下「個人本」と略、図1)です。近年その存在が確認されながら詳細が不明だったものですが、本展開催に向けての調査の中でその所在が明らかとなり、実見の機会を得ることができましたので、ここにその概要を紹介したいと思います。

個人本「舞楽図巻」(1巻、紙本着色、32.3×444.4cm)は、一紙130cm前後の三紙からなり、奥書はありません。応永原本の図様に基づき、巻頭から順に地久、散手、貴徳、抜頭、採桑老、還城楽、八仙、蘇志摩利、綾切、陵王、納曾利の11曲の舞人を一人ずつ描きますが、採桑老と蘇志摩の順番が原本と入れ替わっており、彩色や細部の表現などに応永原本との相違がみられます。描線は堅実で、彩色も金銀泥を用いた丁寧なもので、18世紀後半から19世紀にかけての製作と判断されます。

これら2本の模本と応永原本を比較してみます。東博本は、4曲分を欠いているものの、装束の模様や、色も含めて応永原本をかなり忠実に写しています。蘇志摩(利)を比べてみると、東博本は素朴な顔の描写、段を分けて平行に流れる蓑の墨線や、笠の右側のつば部分が少し

膨らむ様子なども忠実に映しています(図2・3)。一方で、個人本では蓑の墨線が「八」の字を描くような描線で写実的な描写になっており、また笠のつばの膨らみもありません(図4)。また個人本は、配色や装束の文様、面部の表現などにも応永原本と相違がみられます。例えば八仙の装束をみると、応永原本では玉に苔を表した文様ですが(図5)、個人本では近世以降主流となる鯉に網をかけた文様となり、面の嘴の先の鈴も描かれていません(図6)。これは応永原本を写したというよりは、当時に使われていた舞楽装束をもとにしているように思われます。あるいは模様が省略された応永舞楽図の白描の粉本があり、そうした粉本の写しに着彩したものとも考えられます。いずれにしても、このような装束の文様や彩色の相違は各所にみられ、個人本は応永原本の直接の模本ではなく、別にあった模本を粉本としていることが想定されます。

さて個人本では、曲目の書き込みにそれぞれ「右」「左」が記入されています。これは、舞楽における左方(唐楽)と右方(高麗楽)の別を記したものです。順に書き出してみると、「右地久四人」「左散手」「右貴徳」「左抜頭」「右採桑老」「右還城楽」「右八仙四人」「右蘇志摩利」「右綾切」「左陵王」「右納曾利二人」とあります。こ

で注目すべきは、本来は左方である採桑老と還城楽が、右方として書かれている点です。抜頭・採桑老・還城楽などは舞われる「場」によって左右が変わる特殊な演目で、採桑老や還城楽を右方として舞うのは主に宮中における習わしであり、個人本が宮中の舞楽に由来するものということが考えられます。この関連についてはもう少し慎重な検討が必要ですが、こうした書き込みが製作の背景を考えるうえで有効な情報になるかもしれません。

以上、紙数の都合もあり概要の簡単な報告にとどまりましたが、今後さらに研究を進め、これらの舞楽図巻の位置づけを検討したいと考えています。「みやこの舞楽」展では、この個人本・東京国立博物館本ともに出陳が叶い、並べての展示をすることとなりました。両本を比べて見ていただけるまたない機会となりますので、是非会場でじっくりご覧ください。

(一本崇之)

※図1・4・6は筆者撮影。図2・5は『陽明文庫蔵舞絵(舞楽散楽図)・法隆寺旧蔵措鼓』(上野学園大学日本音楽史研究所編、思文閣出版、2016年)、図3は ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)より転載しました。

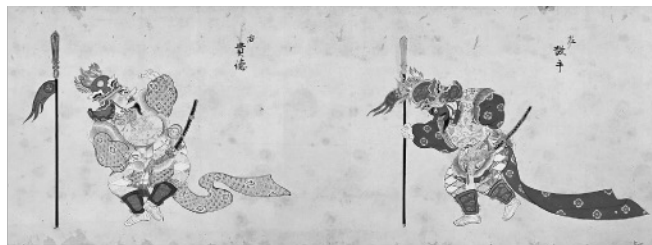


図1 「舞楽図巻」個人蔵(部分)



図2 応永原本(部分)



図3 東博本(部分)



図4 個人本(部分)



図5 応永原本(部分)



図6 個人本(部分)

季刊 美のたより No.231

令和7年 7月 11日

発行 大和文華館